

# Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No.18 [ 2002 / 2003 No.5 ]



## 日本サンゴ礁学会 第6回大会について

標記大会を下記の日程、会場で開催します。  
多くの方のご参加をお願いいたします。  
詳細は、本ニュースレターP 3をご覧ください。

— 期 間 —

2003年11月13日(木)～11月16日(日)

— 会 場 —

石垣市民会館  
(沖縄県石垣市)

### contents

page

連載 1 : サンゴ礁に暮らす人々 -12-	2
連載 2 : サンゴしょう夜話 -12-	2
日本サンゴ礁学会第 6 回大会について	3
ニュース	3-5
評議員選挙当選者のご報告	5
評議員会議事録	6
連載 3 : 若手会員の眼 -14-	6
連載 4 : 瀬底日記 -8-	7

## 連載 1 サンゴ礁に暮らす人々 -12-

### 矢投げ競技

慶應義塾大学名誉教授 近森 正

矢投げの競技（ティカ）は風の神々の戦いだ。天空の一角から、たがいに矢を投げあって宇宙を支配する。

「おいらの矢はガリゼウの神。大空を飛んで、トンガレ  
レヴァにとどく。敵のチャンピオンを打ち負かせ。  
やつらのカヌーはひっくり返って、メチャクチャだ。  
おいらのカヌーは女のあそこ。やつらは虜になって  
息絶える。  
太鼓を鳴らせ、もっと打て！打て、打て、強く、  
もっと打て！  
耳をつんざくまで。  
タカ、タカ、タッタ、ホイ。」

割れ目太鼓の甲高い響きがラグーンにこだまして、夕陽の輝きの中で跳ね返る。男たちは村ごとにチームを組んで、海辺の道で矢投げを競い合う。

投げ手の男は口をへの字に曲げて真剣だ。矢の長さは60センチから1メートルくらい。クサトベラの枝を切って、簡単につくられる。先端に堅いミズガンピの枝で作った矢じりをつけることもある。親指と中指で矢をはさみ、人差し指でバランスをとりながら、方向をさだめる。目標は百メートルくらい離れた道の一端。二、三步、助走しながらアンダー・スローで投げる。矢は美しい軌跡を描きながら、地面をかすめるように飛ぶ。

相手の村の面々は道の両側に陣取って、投げ手を冷やかしたり、からかったりしながら、矢の飛んで行く先を見守っている。こうして、最も遠くに飛んだ矢を競い合う。勝ったチームはそのたびに、勝利のチャントを歌い、ココナッツの汁で祝杯をあげる。



写真：プカプカ環礁ロト村。矢投げ競技（ティカ）は原ポリネシア文化に由来する伝統的なスポーツで、本来、宗教的儀礼をともしなうものであったらしい。

「ココヤシの葉はちぎりとられた。風は変わった。  
トビウオの群れがやってくる。  
おオ！お前の力。お前は誇りにするだろう。  
さア、来れ。来れ。

大漁を祝え。皆集まって、ガリゼウの神に祈ろう。」

三ヶ月間近く、毎日あくこともなく吹きつけていた東南の貿易風がぱたりと止んだ。夜空からスバル星が消えて、テルアパの星が現れた。北西の風が吹き始めるまでのほんのひととき、おだやかな季節が続く。サイクロンが襲来するのはそれからだ。

島の人々は風の変化を的確にとらえるのである。

## 連載 2 サンゴしょう夜話 -12-

### 川平湾から岩山湾へ

金沢大学名誉教授 小西 健二

先号で現地の岡地さんから詳しい案内があったように、来年の第10回国際サンゴ礁シンポジウム(沖縄)の前夜祭ともいえるべきパラオサンゴ礁会議が「パラオ及び西太平洋のサンゴ礁の望ましい未来」をテーマに、ほぼ一年前の7月23日から4日間パラオ国際サンゴ礁センターで開かれる。パラオ(ペラウ)といえば、北大東島の深層掘削とともに、1930年代に日本学術振興会内サンゴ礁関係委員会が生んだ、双子の片方であるパラオ熱帯生物研究所の創設と同研究所による画期的な研究が想起される。その業績はサンゴ礁及び造礁生物研究史上に燦然と輝いている(Fautin, 1998MS)。

このパラオ熱帯生物研究所で過した「同居生(old boys: Faulkner & Chesher, 1979)」のつくる岩山会のもとのコロール島南岩山湾(畑井新喜司所長命名: 添付スケッチは田山利三郎による)が、主なフィールドで、なかでもイシサンゴ類の細胞内に共生する生物を光学顕微鏡下の観察から褐虫藻類と断じ、更に分離培養に成功、種の帰属を決めた川口四郎先生の先駆的偉業に、国際サンゴ礁学会は1988年特別賞を贈り、その栄誉を讃えた。Merezhkovsky 仮説(1905)に端を発した細胞内共生は、原核から真核への進化(Margulis, 1970 ほか)やサンゴ礁海域に生息する多彩な造礁生物内に普遍的に共生する藻類の発見をはじめ、細胞の進化を語る主役となった感がある。

1974年より数年間、東大海洋研究所の丸茂隆三・堀越増興両氏を長に石垣島の川平湾一帯でサンゴ礁の環境科学総合研究が行われ、生物班を同海洋研の太田・向井・相生・白山、東京水産大の有賀・大葉、琉球大の山里・西平、県水産試験場八重山支場の嘉数・島袋・村越；化学班を琉球大の兼島・平・大森；地学班を金沢大の小西・松村・松

田・富樫などが、それぞれ分担した(Horikoshi, 1981)。川平公園茶屋を定宿とする川口先生と同宿になると、先生を囲むモーニングセミナーを、毎朝の日課とさせて頂いた楽しい思い出がある。慈父のような先生が、眼を輝かせて語られる岩山湾でのお仕事を聴きながら、何故かセレンディピティという単語が私の脳裏をよぎった。あれからほぼ四半世紀を経て、初めて聖地岩山湾を訪れる機会が到来した。しかも同湾を前に、川口先生の訃報に接するという千載一遇のチャンスである。当時の地質図(田山, 1935)を手に、杉山敏郎・江口元起両先輩によるパラオサンゴ *Palauastrea ramosa*、パラオコカメノコキクメイシ *Goniastrea palauensis*、議論のある岩山サンゴ *Porites (Synaraea) iwayamaensis*などを模式地で観たいものである。

近着誌は、JICAが高岡亨輔パラオ所長のもと、岡地賢氏ほか3名の派遣専門家によるパラオ国際サンゴ礁センター強化プロジェクトを進める一方、シニア海外ボランティアの中澤重夫氏は自然環境保護が経済優先かという万国共通のテーマに悩みつつ、全パラオ漁業連合会と地場市場向け水産加工物の製品化などに活躍中、と伝えている。パラオサンゴ礁会議では、多分野の研究発表の聴講と、久しぶりの川口先生との再会が最優先だが、パラオ熱帯生物研究所跡や岩山湾のサンゴ相と周辺地質の見学、JICAの援助でできたパラオ国際サンゴ礁センターのGCRMNノードとしての活動、そして嘗て沖縄のJICA研修コースを受けた現地専門員とお話なども出来ればと願っている。



資料：コロール島頂部から見下ろした岩山湾とサンゴ礁の遠景（田山, 1935）

# 日本サンゴ礁学会 第6回大会 ご案内

日本サンゴ礁学会第6回大会を、  
以下のように開催いたします。  
皆様のご参加をお待ちしております。



大会実行委員長 西海区水産研究所石垣支所 玉井 恭一

開催期間：2003年11月13日（木）～2003年11月16日（日）

会場：大会・公開シンポジウム：石垣市民会館  
（石垣市浜崎町1-1-2、Tel: 0980-82-1515）

懇親会：ホテルみやひら  
（石垣市美崎町4-9、Tel: 0980-82-6111）

## 大会スケジュール

11月13日（木）  
13:30～18:30 評議員会・  
国際サンゴ礁シンポジウム  
組織委員会  
11月14日（金）  
12:30～13:30 受付  
13:30～17:00 口頭発表  
11月15日（土）  
09:30～11:30 ポスター発表  
13:00～16:00 口頭発表  
16:30～17:30 総会 & ポスター  
賞受賞発表  
18:00～20:30 懇親会  
11月16日（日）  
09:30～12:00 口頭発表  
13:30～16:30 公開シンポジウム

## 第6回大会参加 発表申し込み要領

大会参加・発表申込等期限  
9/20（土）大会参加・発表申  
し込み締め切り  
10/10（金）要旨集原稿締め切  
り（郵送のみ受付）参加費事前振  
り込み期限

参加登録料  
事前振り込みは、一般4500円、  
学生2000円。当日支払いはそれぞ  
れ5500円、3000円となります。  
懇親会費は4500円（共通）です。  
大会には参加されない同伴者の方  
も懇親会にはご参加いただけます  
（同額）  
当日の混雑を避けるため、事前  
の振り込みにご協力下さい。事前  
振り込みの期限は10/10までとさ  
せていただきます。なお、事前振  
り込みをいただいて当日不参加の  
場合、参加登録料は返却いたしま  
せんが、後日講演要旨集を郵送い  
たします。

大会参加・発表申し込み先  
大会事務局 林原 毅 宛、な  
るべくe-mailでの申し込みにご協  
力下さい（jcrs6@ml.affrc.go.jp、  
subjectを"jcrs6参加申込"とする）。  
FAXまたは郵送で申し込まれる方  
は、下記へお願いします（9/20  
（土）必着）。

907-0451 石垣市椶海大田148  
西海区水産研究所石垣支所  
林原 毅（日本サンゴ礁学会大会事  
務局）宛  
Fax：0980-88-2573

- 参加・発表申し込みへの記載事項
1. 参加者氏名
  2. 所属（学生の方はその旨を  
明記してください）
  3. 住所
  4. 電話
  5. FAX
  6. e-mail
  7. 発表の有無
  8. 懇親会への参加・不参加
  9. 参加費支払い方法  
（事前・当日）
- 研究発表を申し込まれる方は上  
記に加えて、
10. 発表題目
  11. 発表者全員の氏名・所属  
（発表者には をつける）
  12. 内容概略（100字程度）
  13. 発表形態  
（口頭 or ポスター）；  
口頭の方は使用機材  
（液晶プロジェクター or OHP）  
を記載して下さい。

本大会ではスライド映写機は準  
備いたしません。プロジェクター  
による発表要領やポスターの大き  
さ等については、発表を申し込ま  
れた方に後日ご連絡いたします。  
今回もポスター発表を充実させ、  
口頭発表を1会場とする予定です。  
ポスター発表にはプレゼンテー  
ション賞を設けますので、ふるっ  
てご参加下さい。

講演要旨集原稿作成要領  
用紙サイズ：A4、上下3cm  
左右2.5cmをあげる  
書式：タイトル15pt、氏名・所  
属10.5pt（発表者氏名の前に 印）、  
本文10.5pt（40字×40行＝1600  
字程度）  
その他：図表、写真は適宜張り  
込んで下さい。

講演要旨集原稿の送付先（郵送  
のみの受付とさせていただきます  
す：10/10（金）必着）

907-0451 石垣市椶海大田148  
西海区水産研究所石垣支所  
橋本和正 宛（要旨集原稿在中と朱書）

なお、発表申し込み後に発表題  
目や発表者に変更がある場合、訂  
正内容をe-mailまたはFAXにてご  
連絡下さい。

e-mail: jcrs6@ml.affrc.go.jp  
Fax: 0980-88-2573

振り込み方法  
事前の振り込みにご協力下さい  
（10/10（金）まで）。手数料はご負  
担下さい。  
大きな郵便局でしたら、同封の  
用紙を使って休日でも機械からの  
振り込みができると思います。

- ・郵便振替口座番号：  
01730-1-109011
- ・口座名称：日本サンゴ礁学会  
第6回大会事務局
- ・通信欄への記入事項：氏名、  
所属、送金内容  
（一般、学生、懇親会の区別）

複数の方がまとめて振り込まれ  
ても結構ですが、上記を全員につ  
いて明記して下さい。

## 公開シンポジウム （準備中）

日時：2003年11月16日（日）  
13:30～16:30

場所：石垣市民会館大ホール  
主催：沖縄県 環境省  
日本サンゴ礁学会

内容：地域の皆様にサンゴ礁の  
魅力と現状を伝え、広く関心を持  
っていただく目的で、サンゴ礁と  
関わりのある方による基調講演や、  
サンゴ礁の保全の取り組みに関す  
るパネルディスカッションを予定  
しています。



## ニュース 野外で調査や作業を 安全に行うために

サンゴ礁安全調査委員会 杉原 薫 (sugihara@fukuoka-u.ac.jp)



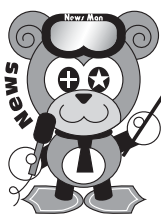
夏は、海洋もしくはその沿岸域での様々な研  
究や業務が、一年のなかで最も盛んに行われる  
季節です。この夏の調査や作業に向けて具体的  
な計画や準備を立てられている方、あるいは、  
すでに調査・作業ともに無事完了してホッとさ  
れている方も多いと思います。しかし、その際  
に想定される各種の事故やトラブルの防止、万  
一それらが起こった場合に行うべき適切な対処  
法は、それらの計画や準備のなかに十分に盛り  
込まれているのでしょうか。大学に所属する私に  
とって、自分の研究のみならず学生の卒論や修  
論指導のためにサンゴ礁に行く機会が圧倒的に  
増えるこの時期は、思う存分泳ぎ回ることがで  
きて嬉しい反面、（特に学生の）安全管理に対

して非常に神経質にならざるを得ないことが毎  
年悩みの種です。

ところで皆さんは、昨年11月の日本サンゴ  
礁学会第5回大会期間中に、「調査ダイビング  
における事故防止と安全管理-アンケート結果  
をもとに-」と題して日本サンゴ礁学会サンゴ  
礁調査安全委員会の主催による公開ディスカ  
ッションが行われたことをおぼえていらっしゃる  
でしょうか（詳細は、ニュースレターNo. 16  
のP3をご参照下さい）。私を含むサンゴ礁調査  
安全委員会一同は、学会期間中だけでなくホー  
ムページやニュースレターなどの媒体も通じ  
て、海洋域での調査や作業に携わる様々な機関  
の人々が、討論や情報交換を積み重ねていく機

会がこれからますます増えていくことを願っ  
ています。会員である私たちが、常に安全管理  
に心がけて調査や作業を行うことにより、事故  
やトラブルを回避できる能力を身につけること  
は、学会全体での安全管理意識の向上や調査・  
研究能力のレベルアップへとつながります。そ  
のためには、まず皆さんからの積極的な情報提  
供が必要です。前回の公開ディスカッションの  
折には、海洋技術センターの方から、当セン  
ターで潜水を伴う技術者や研究者を対象に行われ  
ている潜水技術研修の資料（JAMSTEC, 2000）  
のコピーを送付していただきました（この場を  
借りて改めてお礼申し上げます）。提供してい  
ただく情報としては、事故やトラブルの事例と  
その対処法、調査危険地域、様々な研究機関で  
の安全管理体制などを想定しています。このよ  
うな議題で討論を行いたいとか、どここの地  
域で安全に調査（作業）を遂行する前に地形や海  
象に関するローカルな情報が知りたいなどのご  
希望のほか、今後の活動内容へのアドバイスな  
どがありましたら、是非サンゴ礁調査安全委員  
会までご連絡ください。





## ニュース②

### サンゴ礁保全委員会が開催されました

昨年11月の第5回日本サンゴ礁学会で、サンゴ礁保全委員会を設置することが決まりました。その概要はJCRS News No.16で、土屋委員長から報告されていますが、その後2回のサンゴ礁保全委員会が開催されましたので、その内容を要約し、お伝えします。

#### 第1回委員会

2003年1月23日に東京の東京工業大学で開催されました。参加者は、関東を中心に、研究者・行政・企業・NGO/NPOなど保全委員会と呼ぶにふさわしい多彩な方々が20名集まりました。

土屋委員長から委員会の説明があった後、1)保全に関する重点項目を議論、2)環境省のデータブック作成協力、3)ICRS(第10回国際サンゴ礁シンポジウム)でセッションを設けて保全戦略を提案するという、当面の活動内容が決められました。「保全」という言葉の意味の確認も必要だという議論もありました。また、組織については、名簿作成(ML作成)すること、重点項目についてのワーキンググループを作ることが確認されました。

引き続き、サンゴ礁データブックの作成について、環境省から説明と協力要請があり、それを受けて、保全委員会は全面的に協力することとし、10th ICRSでの配布を目指して、まず、構成案を保全委員会のメンバー7名で検討することになりました。

さらに、10th ICRSで「保全」についてどのようにアピールするかについて議論が行われ、上記のデータブックの配布に加え、「アジア型のサンゴ礁保全」をテーマにした特別セッションを設けることなどが確認されました。また、10th ICRSへの協力を求めている日本財団の資金でサンゴ礁保全に関する研究・活動が進められる可能性があることが報告され、保全委員会の活動として取り組む可能性について議論がされました。

そのほか、保全に関する社会的なアピール文について、総合的に議論判断し、必要に応じて提出していくこと、より広くNGO/NPOに保全委員会への参加を呼びかけることなどを話し合いました。

#### 第2回委員会

第2回目は、2003年6月7日に沖縄で開催されました。1回目に比べて、NGO/NPO・市民の方々の参加も多く、行政も沖縄県関係の方々の参加もあり、36名の方によって活発な議論が行われました。

まず話し合われたのは、前回の委員会で環境省に協力して作成していくことになったサンゴ礁データブックについてです。事前に検討された構成案を元に説明が行われ、意見交換が行われました。この本は日本サンゴ礁学会が編著者で環境省から発行されること、実務作業は環境省の委託を受けた自然環境研究センターが行うこと、などが確認されました。引き続き、10th ICRSの特別セッションについて、瀬岡先生から趣旨と経過について説明があり、質疑応答が行われました。これら2つの活動は、1年後に迫った10th ICRSに関わるものであり、今後急速かつ着実に進められていくのです。

ただし、保全委員会は、ICRSがゴールではなく、その成果も踏まえつつ中長期的展望にたった活動が行われるべきものです。それを確かなものにしていくために、委員会内にワーキンググループ(WG)とその核となる担当者を決める議論が行われました。その結果、統括を入れて7つのWGが設定され、それぞれの担当者が決まりました。

広報委員会 中井達郎

- ・統括班 土屋+各WGの担当者+事務局 瀬岡
- ・モニタリング・ネットワーク班(アーカイブデータ整理を含む) 木村, 山野
- ・保全・再生技術班(サンゴ礁生態系維持機構解明も含む) 大森, 藤原
- ・統合的沿岸域管理班(環境ストレス低減策も含む) 鹿熊, 大見謝
- ・海外展開班(日本財団プロジェクト対応を含む) 土屋, 高橋
- ・教育班 中野, 松田
- ・広報班 中井, 波利井

各ワーキンググループの役割については、各担当がまとめ、提出・公開することになりましたが、委員会の場では、アピール文等の社会的な役割を果たすシステムについて議論がされ、「広報班」がその試案をまとめることになりました。

このWGは、上記担当者に限らず、多くのメンバーが加わり、活動をしていくものです。保全委員会に多くの方に参加していただくためにも、メーリングリストの立ち上げが望まれます。

今回は、多くの地元NPO/NGOの方が参加されており、その方々から下記のようなテーマでアピールや提案等がありました。

- ・宜野湾マリナ建設計画についてのアピール
- ・沖縄のサンゴ礁保全についての企業協力アピール事業プラン
- ・オニヒトデ・プロジェクト
- ・11月の第6回サンゴ礁学会公開シンポジウム

学会評議会前の2時間という限られた時間の中で、大変に多岐にわたる内容で、活発な議論・意見交換が行われました。さまざまな方々のサンゴ礁保全に対する思いと学会への期待をひしひしと感じる2時間でした。

今後さらに多くの方々の参加と着実な活動の進展を望んでやみません。



## ニュース③

学会後援報告

### 海辺の環境教育フォーラム 2003 in 石垣島

「海辺で環境教育の活動をする人が集まったらミーティングをやったらどんなだろう・・・?」との思いから、静岡県賀茂村安良里で始まった実践型のフォーラムは2回の同地での開催を経て、第3回フォーラムが、石垣島で行われました。開催期日は3月7日～9日で、いくらサンゴ礁の島とはいえまだ肌寒く、ぐずついた天気の中での開催でした。にもかかわらず、主催者始め90名の参加者達の意気込みには暑いものがあり、クールダウンにはちょうど良かったのかも知れません。

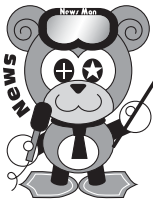
プログラムはWWFしらほサンゴ村での黒

糖造りと渡り鳥のネイチャーゲームに始まり、環境教育教材「体験的に学ぶ『サンゴ礁』」を開発者の解説付きで体験するプレワークショップが実施されました。引き続き催されたフォーラムでは、石垣島内の崎枝小学校での環境省のモデル事業としての実践例始め、東京湾や有明海の海辺での豊かな経験からの報告や世界的視野に立った提言がなされました。私も、名護小学校の総合学習での取り組みなどを報告しました。出席者の多くは、各地ですでに活躍したり、これから活動しようと言う方々でフロアーからも熱のこもった発言

琉球大学熱帯生物圏研究センター  
瀬底実験所 中野義勝

が相次ぎました。この熱気は懇親会まで持ち込まれ、和気藹々と議論に花が咲きました。最終日は、「『サンゴ礁』体験」とゴミを考えるフィールドプログラムの後、多種多様なテーマの分科会が行われ、総合討論で密度の高いフォーラムの幕を閉じました。

日本では海辺と上手につきあえない時代が長かったように感じますが、今後もこのような活動がサンゴ礁を始めとした海辺の環境保全を息の長い文化にまで築き上げてくれると思います。今回「サンゴ礁」に関わるものとして、学会の後援を評議員会に呼びかけ実現したことは、このように期待してのことでした。ここに会員各位にご報告し、これからのみなさんの活動の参考にになればと思います。海辺の環境学習フォーラムURLは、<http://interpreter.ne.jp/umibe/> です。



## ニュース④

### リーフチェック って何だろう？

コーラル・ネットワーク  
代表 宮本育昌

Tel / Fax: 046-233-7519  
e-mail: miyamoto@hs.st41.arena.ne.jp

こんにちは。「若手会員の眼」に引き続き、活動についてご紹介させて頂けることになりました。今回は、我々が日本国内で推進している「リーフチェック(以下RC)」についてQ & A形式でご説明させて頂きます。

Q: 目的は？

A: 目的は (1) 人間活動がサンゴ礁に与える影響を全世界で比較・評価する、(2) サンゴ礁を持続的に利用する方法を探る、(3) 調査への参加や報道を通じて市民のサンゴ礁への保護意識を高める、ことです。

Q: どこで調査しているのですか？

A: 世界の50カ国以上のサンゴ礁で調査しています。RC開始後の5年間(1997-2001)で、

のべ1500カ所以上での調査が行われました。日本では昨年度は21カ所で調査を行いました。Q: いつ調査しているのですか？

A: 日本ではボランティアと現地ダイビングサービスの都合を考えて、大半の調査チームが春と秋の週末に設定されています。スケジュールは我々の運営するウェブサイトに掲載しています。

Q: どのようにデータを集めているのですか？

A: ボランティアが調査できるように、単純かつ限定された種類について、魚類・無脊椎生物はBelt Intercept Transect、底質についてはLine Intercept Transectでデータを集めています。調査範囲は水深2-6mと6-12mの2水深で、それぞれ20m × 4区間を調査しています。

Q: どのように調査結果をまとめているのですか？

A: 世界中のデータは本部であるReef Check Foundationが一括してまとめ、毎年春に報告をしています。また、昨年は1997-2001の調査結果をまとめた「The Global Coral Reef Crisis: Trends and Solutions」が出版されています。国内のデータは国内全体については我々がまとめて学会等で発表しています。また、各チームに参加した科学者が独自にまとめて報告することもあります。報告書については我々から提供することが可能です。

Q: データはどうしたら入手できるのですか？

A: 世界のデータについては本部から入手できます。国内のデータについては我々も提供可能です。今後はウェブサイトにも掲載する予定にしています。

Q: 参加するにはどうしたらいいのですか？

A: 簡単です！「参加したい」とご連絡頂くだけでOKです。参加する方法としては3種類あります。

- (1) ボランティア: 全て自己負担での参加となります。(我々もここに含まれます)
- (2) チーム科学者: 修士以上(原則)の方ならボランティアを指導し、データの科学性に責任を持つ科学者として参加して頂きたいと思えます。ボランティアまたはダイビングサービスから実費が支給される場合があります。
- (3) 主催者: ダイビングサービスの方はぜひ調査主催・共催をおねがいします。我々が運営をサポートします。

皆様からのご連絡をお待ちしています!!!

< 連絡先 >

ウェブサイト

電子メール

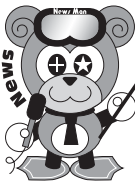
本部

<http://www.ReefCheck.org/>

[Rcheck@UCLA.edu](mailto:Rcheck@UCLA.edu)

日本

<http://hs.st41.arena.ne.jp/reefcheckjapan/rc-info@hs.st41.arena.ne.jp>



## ニュース⑤

### 第2回国際熱帯生態系管理シンポジウム (ITMEMS II)の開催について

環境省 長田 啓

会場の垂れ幕



2003年3月24日から27日にかけて、マニラにおいて第2回国際熱帯生態系管理シンポジウム(ITMEMS)が開催された。このシンポジウムは、サンゴ礁保全のための国際的枠組みである国際サンゴ礁イニシアティブ(ICRI)が主催するサンゴ礁と関連する生態系保全のためのシンポジウムで、国際サンゴ礁シンポジウムと同様に4年おきに開催され、第1回は98年にタウンズビルで開催された(今回のITMEMSは当初は前年秋開催予定であったが、マニラにおける爆弾テロ等を受けて3月に延期されていた)。ITMEMSは、特にサンゴ礁の保全と管理に関する共通認識の醸成を目的として、研究者のみならず、行政、NGO、保全管理の当業者等を対象としている。

会議は、イラク戦争の影響を受けてアメリカの関係者等多くの参加者が直前にキャンセルするなどのアクシデントもあったが、30を超える国々から、わが国からの7名を含む約200名の参加者を迎え、海洋保護区の管理、再生・復元、モニタリング等の重要な課題に



日本人参加者

ついていくつかのセッションに分かれ、積極的な意見交換が行われた。各セッションでは参加者からのプレゼンテーションよりもディスカッションに多くの時間が割かれた。

なお、初日の全体セッションでは、国際サンゴ礁学会のT.ドーン会長から第9回のバリICRSの成果報告と第10回の沖縄ICRSの紹介があった。今回のシンポジウムのオーガナイザーであるR.ケンントン博士からは、第10回ICRSにおいても今回のITMEMSの成果については是非紹介をし、ITMEMSとICRSの連携を図りたいとの話があった。また、多くの参加者からICRSに対する期待の声と保全・管理に向けたセッションの充実を希望する声があった。

会議の詳細はITMEMS ホームページ

(<http://www.icriforum.org/itmems.html>)を参照

## 評議員選挙 当選者のご報告

今回の評議員選挙の結果をお知らせします。

選挙管理委員長 灘岡和夫

開票日: 平成15年5月29日

開票場所: 東京工業大学  
灘岡研究室

開票・集計責任者:  
選挙管理委員長 灘岡和夫

開票立会人: 中井達郎、大久保奈弥

投票数: 111通

当選者(敬称略、アイウエオ順):

秋道智彌、大見謝辰男、大森 保、大森 信、鹿熊信一郎、茅根 創、菅 浩伸、木村 匡、小西健二、杉原 薫、鈴木 款、立田 稜、近森 正、土屋 誠、中井達郎、中野義勝、中森 亨、灘岡和夫、西平守孝、林原 毅、波利井佐紀、日高道雄、藤原秀一、カサレト・E・ベアトリス、松田伸也、山里 清、山野博哉(27名)



## 2001-2003年評議員会

### 議事録

日時：2003年6月7日（土）  
12時40分～14時  
場所：サザンプラザ海邦4階  
「かりゆし」

出席評議員：山里、大森 保、大森 信、茅根、菅、小西、土屋、中井、中野、中森、瀬岡、林原、波利井、日高、藤原、松田、山野  
委任状：秋道、河名、杉原、鈴木、近森、中谷、西平、長谷川  
欠席：工藤、立田、野崎

#### 【報告事項】

- 1) 会員動向（茅根）  
2001年3月の会員数347に対して、2003年3月は373で30増。  
ただし、学生会員数は半減（主に通常会員へ移行）して、全体として新しい学生の入会が少なくない。  
賛助会員も1増で10とまだ少ない。
- 2) 会計（茅根）  
会費収入は230-240万円。支出が年によって変動。
- 3) 企画（中森）  
日本のサンゴ礁Ⅱの編集を進めている。
- 4) 学会誌（日高）  
5号編集中。投稿原稿が不足している。
- 5) 広報（山野）  
ニュースレター14-17号発行、ICRS News 2-5号発行。

- 6) 安全（茅根）  
アンケート結果をまとめて、会員に配布した。
- 7) 保全（瀬岡）  
昨年11月に発足。本日午前中に会合を行い、体制について議論し7つのWGを設定した。
- 国際サンゴ礁シンポジウムで特別セッションを設ける。
- 8) 2003-2005年評議員選挙結果の報告があった（瀬岡）
- 9) 「海辺の環境教育フォーラム2003 in 石垣島」（3月7-9日）後援について報告があった（中野）

#### 【審議事項】

- ・メール上での審議の原則  
評議員会メイリングリスト上での決定プロセスについて、事務局から提案があり、承認された。
- ・適当な期限を切って意見を求め、異議がなければ（無回答含む）承諾されたものとみなす。
- ・異議があった場合、全員から賛否を得る、または評議員会における議論に切り替える。
- ・決定内容と経過は、評議員会で報告し、承諾を得る。
- ・設立以来会費未納会員（現在発送停止）について、退会とすることに決定した。
- ・会則第12条の表現を検討し、発送停止と退会の運用方法を決めることにした。
- ・学会HPのデザインと維持を外注することについて、広報より提案があり、承認された。
- ・沖縄テレビを中心とし、多様な企業がサンゴ礁の保全キャンペーンに参画して活動し、利益の一部

を日本サンゴ礁学会に寄付する、という案が土屋保全委員会委員長より提案された。趣旨は了解されたが、具体的な進め方などは今後検討する必要があることが確認された。

・大会運営のために準備金を学会から支出することについて、林原2003年大会実行委員より提案があり、今後大会実行委員会に10万円を支出し、大会終了後原則返納することが決定した。

- 2) 各委員長の選任（山里会長推薦）  
企画 中森委員長  
学会誌 日高委員長  
広報 山野委員長  
安全 杉原委員長  
(茅根から依頼)  
保全 土屋委員長  
選挙管理 瀬岡委員長  
庶務 東京大学 渡邊、飯嶋

若手の評議員を推薦する（）内は、確認する人  
藤村（大森 保） 藤田（中森）  
阿嘉島臨海研究所・橋本（大森 信・林原）より1名

庶務 大森（保）が検討する。

## 2003-2005年評議員会

### 議事録

日時：2003年6月7日（土）  
14時～14時半  
場所：サザンプラザ海邦4階  
「かりゆし」

出席評議員：大見謝、大森 保、大森 信、鹿熊、茅根、菅、木村、小西、土屋、中井、中野、中森、瀬岡、林原、波利井、日高、藤原、松田、山里、山野。  
委任状：秋道、杉原、鈴木、近森、西平、カサレト  
欠席：立田

- 1) 新評議員会体制  
会長を山里に決定した。  
副会長を小西に、事務局長を茅根に、山里の指名・委任により決定した。  
設立以来の評議員は、今期（4期目）で任期切れになる。

- 3) 2003年大会準備状況（林原）  
・11月13日（木）～16日（日）石垣市民会館  
・11月13日午後、評議員会、10ICRS組織委員会（モニタリングセンター）  
・11月16日午後 公開シンポジウム（沖縄県、環境省と共催）

- 4) その他  
投稿論文について、原稿を集める手段を検討するべきである（大森 信）  
通常投稿だけではなく、保全の報告、シンポジウム特集号などを入れる。  
修士論文、卒業論文なども掲載できるような期間にしてみようか  
現在は、6月末までに原稿を出してもらえばよい。  
編集委員会で検討して、改善策を提案する。  
評議員も自ら書く。

## 連載 3

### 若手会員の



A young member's eye

駒澤大学大学院  
人文科学研究科地理学専攻  
博士後期課程 鈴木倫太郎

みなさん、はじめまして。駒澤大学大学院人文科学研究科地理学専攻、博士後期課程の鈴木倫太郎です。

私は大学で海岸地形が専門である小池一之先生の指導の下、主に石垣島のサンゴ礁において、ウニ類の生物侵食に着目し、地形学の立場からウニ類が生産する堆積物やサンゴ礁形成との関連について研究を行なっています。実際には常夏の石垣島まで行き、ひたすらウニの糞を収集しており、ある人からは「ウニの糞の研究者ですか？」ときかれた事もあります。

私が所属する大学院では、人文・自然地理学の様々な分野の院生が在籍し、異なる研究分野の話聞く事ができて良い刺激となっています。しかし、文系の大学ということもあって同じ研究分野の研究者が皆無であり、指導の先生以外と研究について議論する機会が得られず、日頃寂しい思いをする事が多いです。1度調査にでかけると長期に及ぶことが多く、大学に戻る時は全身小麦色に焼けているために、研究室では浮いた存在になってしまい、先生方からも「鈴木君はいつも良い色してるね～」と冷やか半分に言われてしまうことなどしばしばです。

このような状況の中で、私は週に一度、東京都立大学の堀 信行先生を中心に催されている「サンゴ礁勉強会」に参加しています。都立大学の院生である佐藤崇範さんが発起人となって4年前から始まったこの勉強会は、現在は都立大学の学生だけではなく、以前若手会員の眼に

寄稿された慶應大学の名島弥生さんも参加され、学校・分野の垣根を越えた方々が集まります。この勉強会の内容は、サンゴ礁研究に関する書籍や学術雑誌の輪読、参加者の研究内容の紹介が中心となっており、現在のサンゴ礁研究について学ぶ良い機会となっています。こうして紹介すると堅苦しいイメージですが、決してそうではなく、たまに沖縄の三線について、その弾き方や唄についての話題提供があったりと、楽しくサンゴ礁に関する勉強をしています。同じ分野の研究者や学生が所属する研究室では、日頃から意見交換できるため、周囲に同じ分野の研究者がいない不憫さは感じないと思いますが、私のような立場の院生は、周囲との情報交換や、新しい知識を得る機会が極端に少なく感じています。そのため、毎週1回サンゴ礁研究に関する勉強会に参加することによって、新しい知識を得ることだけではなく、自分の研究内容を聞いてもらうことで研究の位置付けや足りない部分を補うことができ、とても有意義な場となっています。

日本サンゴ礁学会においても、私のような立場の人間は様々な分野の研究者と交流が持てる貴重な機会となっています。学会名簿を見ても、日本サンゴ礁学会には多岐に渡る分野の方々が所属しているのやいます。サンゴ礁というキーワードを通じ、様々な方々と知り合えることは、サンゴ礁および日本サンゴ礁学会の大きな魅力ではないでしょうか。

私達の勉強会では、皆様の参加をお待ちしております。分野を問わずご興味のある方、自分の研究室では話にくい事などありましたら、是非この勉強会で話してください。また、不定期ですが、お酒を呑みながらの夜の勉強会も開催しております。こちらの方だけの参加も大歓迎ですので、ご興味のある方は、ぜひ下記アドレスまでご連絡ください。YHU00511@nifty.ne.jp

## 連載 4

瀬底日記 -8-  
大橋

琉球大学熱帯生物圏研究センター 瀬底実験所 中野義勝

クジラが来た。それもマッコウクジラだ。瀬底大橋の上から覗き込んで見えるのは、左に寄った噴気口の付いた巨大なおでこ。おそらく普通に暮らしていれば一生目にすることのない、憧れのモビーディックの勇姿である。が、勇魚は波間にたゆたうばかりで動かない。「病気が、怪我か？」橋の上の見物人は増えるばかりで、とうとうパトカーまで出動して交通整理を始めた。大橋にパトカーが出るのは、年に一度の海洋博公園の花火大会以外ない。それほどの人だかり。海上にもボートが多数繰り出して、こちらはボートから観察中の水族館の職員が交通整理にまで気を使わされている。クジラは2日ほど休養して？沖合はるか消え去った。本当に、海は広いと感じた瞬間だったろうが・・・私は、・・・見逃した。日曜日に、東海岸に調査に出かけた日だった。最近、こんな悔しいこともない。

大橋からは、ジュゴンが見えたこともある。これは元気であちらかと思えばまたこちら、実験所のボートを駆って探索に参加した。とうとう見つけた背中に迫ってみれば、巨大なラワンの丸太だった。ジュゴンと言えば、残念ながら台風の後漂着していた。無念だった。

大橋から見つめる不発弾の爆破処理地点には、巨大な黒い水柱が上

がる。こんな時は、もちろん人間は潜水禁止だ。失神した魚を狙って、安全確認前に我先にフライングする漁師の舟と警察のボートやヘリが激しいチェイスを繰り広げた。意表をつかれたおかしみがあった。

大橋から、50cm クラスのガーラ（シマアジ）が入れ食いだった年がある。大物の時には釣り人同士が協力して、橋のたもとで釣り上げた。観光バスが停車して、窓から釣りたてを買っていくほどだった。その年限りの夢だった。

大橋の本部側には、大小堀川という川がある。大雨の度に赤土を吐きだす様がよく観察できるので、実験所の利用者の目に留まる。川の名とは無関係に、世界一有名な赤土の流出風景には違いない。

スコールが通り過ぎれば虹と共にかかり、満月の光の道にかかる大橋。

人口1,000人に満たない小さな島に、こんな大橋は必要なかろうという外国人研究者がいた。客観的にはそうかもしれない。それに、僅か数分でも船に乗らなければならない離島が地続きになってからも、人口は減り続けている。しかし、人の行き来は活発になり、新たな変化は続いている。物語の中で、人は橋の上で感情を吐露する。橋は、橋から見える風景の変化を楽しむためにあるのかも知れない。

瀬底実験所の2年越しの工事も終わり、床面積で2倍の堂々たる施設になった。この施設がサンゴ礁域での研究の大橋になると良いと思う。

ところで、今年瀬底大橋に門扉が出来た。暴風警報発令と共に閉鎖されるという。橋の開通以来なかった物理的隔離が、僕らにどんなハズニングを起こすのか。不謹慎だが、心配でワクワクする。

## 連載 5

サンゴ礁関連施設  
深訪 INQUIRY  
-9-

東海大学沖縄地域研究センター  
Okinawa Regional Research Center, Tokai University

東海大学海洋研究所所長  
上野信平



西表島は沖縄の南西約400km、台湾の東約200kmに位置し、面積約290km<sup>2</sup>と琉球列島のなかでは沖縄本島に次いで大きく、年平均気温が23.6の亜熱帯の島です。動・植物の多様性は高くイリオモテヤマネコの生息する島として有名になりました。

本センターは西表島北西部の網取（あみとり）湾に面しています。湾奥には2本の河川が流入し、マングローブと海草藻場が形成されています。海岸に沿って幅数十～数百mのサンゴ礁が発達し、外洋性から内湾性へ移行するさまざまな環境に対応して生物相も複雑です。本センターが開設以来観測した西表島網取観測資料（1977年5月～1989年12月）によると年間の月平均気温の最低は1月の18.9、最高は30.0、海面水温は最低が2月の22.0、最高が7月の29.3です。

このような自然溢れる環境で、本センターでは重要水族の増養殖をはじめ、サンゴ礁生態系に関する研究、農牧畜資源研究、エネルギー資源研究などの自然科学から考古学や地域経済などの人文・社会科学まで多岐にわたる研究・教育を目的としています。そのなかでも特に地域密着型の研究に重点を置いています。

本センターは1976年に海洋研究所西表分室として開所し、1981年

に沖縄地域研究センターに改組され、現在に至ります。

また2001年には同じ西表島の浦内地区に新たな施設を設置し、活動範囲も広がりました。

開設当初は海洋生物の分類学的研究や生態研究、海洋環境に関連して海洋物理学、海洋化学、また海洋土木工学など海洋関係の研究が主体でしたが、組織の改組を契機にマングローブや水稲、シバや野生ランなどの農学関係の分野も多くなりました。また最近では地球環境の問題から紫外線や地震、地磁気、人工衛星による環境観測、考古学などが加わり、それぞれ精力的に研究を実施しています。

これらの研究を支える施設としては2.6t、0.8t、0.3tの3隻の船舶の他シーカヤックがあります。網取施設では電気が来ていないため、すべて自家発電機と太陽光発電で賄っています。また上下水道設備もすべて自家施設です。常駐スタッフ3名で、年間の利用者は延べ約3,000名です。利用者の特に多いのは8、9月です。利用者の多くは本学関係者ですが、毎年多くの学外研究者も利用しています。

石垣島までは空路ですが、石垣島 西表島は海路です。新しい浦内施設は西表島の港からバスがありますが、網取施設にはバスの終点の白浜から僱船が必要です。



連絡先：〒907-1541 沖縄県  
八重山郡竹富町字上原 870-277  
TEL (09808) 5-6007  
FAX (09808) 5-6009

編集  
後記 Edit postscript

れも日焼けにはご注意下さい。

友人をはじめ、同僚や学生からも「チョコボール」とよばれる季節がやってきました。みなさんもこれから野外に出る機会が多くなるかと思いますが、恥ずかしいニックネームをつけられないよう、くれぐ

編集担当 杉原

JCRS  
Japanese Coral Reef Society

2003年7月25日発行

日本サンゴ礁学会ニュースレター  
Newsletter of Japanese Coral Reef Society  
No.18 [2002/2003 No.5]

●編集・発行人／野崎・波利井・中井・山野・杉原・木村 ●発行所／日本サンゴ礁学会  
●事務局／茅根 創 <kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp>  
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院  
理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358



# 手のひらサイズのコンパクトな水位計！



**DIK-604A**  
**OTDダイバー水位計**  
溶存酸素・水位・温度測定  
ロガー・電池内蔵



**DIK-610A**  
**ダイバー水位計**  
水位・温度測定  
ロガー・電池内蔵

**DIK-603A**  
**CTDダイバー水位計**  
導電率・水位・温度測定  
ロガー・電池内蔵



- **ダイバー水位計のセッティング、測定値の回収・解析はパソコン上で行います。**

(別途専用読取り器とソフトウェアが必要です。)

- **ロガーと電池は内蔵一体型！**

- **設置はダイバー水位計を吊り下げるだけでOK！**

(測定には別途大気圧補正用のダイバー水位計が必要です。)



**DIK-610A-B1**  
**専用データ回収器**

重いパソコンを持たずに  
設置場所でのデータ回収  
が可能です！

## 大起理化工業株式会社

URL : <http://www.daiki.co.jp>  
E-mail : [mbox@daiki.co.jp](mailto:mbox@daiki.co.jp)

本社 〒116-0011 東京都荒川区西尾久7-60-3  
TEL 03-3810-2181 FAX 03-3810-2185

西日本営業所 〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-1-21  
IKK0大津ビル 4F  
TEL 077-510-8550 FAX 077-510-8555